

1 自治体による自然保育の推進事例

身近な自然で実施できる ～東近江市の里山保育～

滋賀県東近江市（市民環境部 森と水政策課（八日市いきものふれあいの里））

自然保育推進の背景

身近な自然環境への限られた接し方に危機感

滋賀県東近江市は、平野部に近畿地方最大の農地面積を有し、森林は市域の56%を占めるなど、身近な所に多くの自然がある。一方で、幼児期の子どもに自然体験活動の機会を提供する時、その種の活動に関心のある保護者の子どもしか参加機会が得られなかったり、活動が、整備された公園や森林等で行われることで、子どもも保護者も、整備された場でないと自然体験ができないと捉えたりするという課題がある。

本市では、子どもの生活圏内に身近な自然があることを活かし、保護者の関心度合いに左右されず多くの子どもが自然を楽しみ、これを通じて幼児期に育った地域に愛着を持ってくれるようにとの思いで、2015年度から里山保育を実施している。

自然保育推進の具体的取組

里山保育の実施手法

本市には、環境省のいきものふれあいの里事業により設置された八日市いきものふれあいの里（通称、河辺いきもの森）があり、年間1万人以上に、スタッフが案内・指導を行うタイプの環境学習を行っている。同森で環境学習のノウハウを蓄積したスタッフが、市内の保育園・幼稚園・幼児園に出向いて、園の近くにある身近な自然に園児と一緒に出掛け、自然体験活動を行うものが「里山保育」である。

本市には、公立・私立を合わせて保育園等が30園あり、いずれは多くの園で里山保育を実施したいと考えているが、園外活動の上では園や保護者の理解と協力が欠かせないため、まずは少しずつ実績を積み重ねていこうと、2015年度に1園からスタートし、2018年度まで毎年1園ずつ増やしながらか実施してきた。1つの園で年間8～10回の活動を行ってきた中で、ある園で年間2回の活動を試行したところ、2回だけでも子どもたちにインパクトがあることが分かったため、2019年度は年間活動回数に2～8回のバリエーションを持たせ、計7園、213人の園児（本市5歳児クラス在園児の20%）に対して里山保育を実施した。

自然保育の紹介

里山保育は、公立・私立の認可園で、主に5歳児クラスの園児に対して、9:30～11:30を目安に実施している。2019年度は、最少5人から最大70人以上の園までを対象に実施したが、いずれの園でも、子どもたちが歩いて行ける距離にある里山や田んぼのあぜ道、水路、社寺林などの身近な自然に出掛け、「探検カード」を持って活動している。このカードは、河辺いきもの森のスタッフが毎回行う下見の際にその時期の自然の状況を把握し、当日子どもたちに見つけて欲しい自然物を図示したも

のである。探検カードの役割は、図示されたものを見つけてもらうためだけでなく、子どもたちの「発見したいと思う気持ち」を喚起するためのツールとして利用している。スタッフは、子どもがカードに図示されていない自然物を発見した場合も大いに誉め、それを他の子どもたちにも伝えることで、発見しようとする気持ちの輪をどんどん広げていく。

この活動を複数回行い、葉っぱの色や草丈の生長、生き物の成長や死などに向き合っていく中で、子どもたちは季節の移り変わりを通じて「この前と違う」という感覚を実感として身に付けていく。自然環境に向き合い、その問題を捉える上で、幼児期から「この前と違う」という感覚を持つことは、極めて重要だと考える。



取組の効果

身近な自然の楽しさを原体験の中に

日々、子どもが主体的に自然と関わって過ごす「森のようちえん」に比べると、1回2時間、年2～8回程度の里山保育の活動密度は到底及ぶものではない。一方、森のようちえんは、子どもの活動に適したフィールドと、それを活かせる指導者の常駐が必要である。また、森のようちえんへの入所が限定的である場合には、幼児期の自然保育に関心のある保護者の子どもしか入所する機会が得られないということもある。

里山保育は、草はらや水路など園の身近にある自然を舞台に、指導者が出向いて実施することで、どの園でも気軽に行え、実施園の全ての5歳児に機会を提供できることに大きな特徴がある。保護者からは、「子どもが活動する〇〇山には今まで関心もなかったが、子どもがあまりにも楽しそうに話すので、初めて一緒に行った。子どもが自信満々に〇〇山の自然を案内してくれた」



などの意見もあり、里山保育が保護者の価値観と行動を変化させたことが分かった。

子どもたちは、今まで「草むら」や「藪」としか認識していなかったところに、とんでもない発見や不思議や驚きが詰まっていることに気づき、それを「楽しい」と感じることで、原体験の中に自分たちが暮らす地域の自然が持つ価値を刷り込んでいく。このことは、少子化や流出人口の増加を憂慮する地方にとって、長期的視点から有効になるのではないかと考えている。